資　料

パ　　リ
―― 誕生から現代まで ――
［XXVI］

P.クールティヨン　著
金　柿　宏　典*　訳注

第 2 帝政（2）

パリ生活

これまでの事すべてが、第 2 帝政時代のパリ生活を話題にする機会を与えてくれる。ロマンチックなシェイクスピアに続き，活気と機敏さに溢れた『ペリション氏の旅行』*Voyage de M.Perrichon*（1860）のラビッシュ[1]が登場する。ラシェルは相変わらず舞台に立ち，頭は「さげられ，胸は広がり，目は生き生きとし，足は女王の如く大地を踏みしめ，声は遠くまで響き，彼女の心の情熱に満ち溢れている」とデルヴォ[2]は言っている。しかしながら，伯父のギリシャ人やローマ人に対し，甥は，ドーミエによって見物され，オッフェバック[3]の熱狂的な音楽に乗ってオルタンス・シュナイダー[4]により歌われた古典悲劇を対置する。ケルン生れの音楽家は当時範を示している。彼はカフェ・リッシュ[5]に自分専用のテーブルを持っており，周りにはナダール[6]，ゴンクール兄弟，ボードレール，ガンベッタ[7]などがいた。フランス産の楽長としてデビューした後，彼はブッフ・パリジャン[8]，ヴァリエテ[9]，パレ-ロワィヤ[10]，フォリ・ドラマティック[11]，ルネサンス[12]と各劇場を次々と渡り歩き，そこで多くの作品を上演し，芝居をさせ歌わせた

* 福岡大学名誉教授

が，特に ―― メイヤック[13] とアレヴィ[14] が彼の台本作者だったので ―― 『地獄のオルフェ』*Orphée aux Enfers*,『美しきエレーヌ』*la Belle Hélène*,『パリ生活』*la Vie parisienne* などを上演した。飛び跳ねるようなリズムを持つ彼の音楽はすべての人をそれに引き込み，四人一組で踊るカドリールのカンカン踊りで足に火花を散らせた。ナドー[15] 作曲の『二人の憲兵』*les Deux Genndarmes* や『荷車引きの女房』*La Femme du roulier* などが高唱されているモンマルトルのムーラン・ド・ラ・ギャレット[16] のブランコに乗りに行く浮気な女工たちのこのパリの中で,『セーヌ川畔の娘たち』*les Demoiselles des bords de la Seine* を描いたクールベの親友シャンフルーリ[17] は，この画家と共に写実主義を提唱したのである。ボードレールはくず屋のワインを飲むようになる。メリヨン[18] は「この都市の暗黒の王」noire majesté de la ville を彫刻するが，ヴィヨ[19] は『パリの臭い』*les Odeurs de Paris* の中で，この都会の黴臭さを感じさせてくれる。

芸術家たちのボヘミヤンに政治家のボヘミヤンが参入し始めるが，そこではカンベッタがラブレーのぼろぼろになった一冊を何時も手元においていた。しかしまた『オランピア』*Olympia*[20] でサロンのスキャンダルとなったマネや，「魅力的だが発育不全の才能に満ちた散策者たち」即ち大通りをぶらつく人たち，優雅な人たちがいた。後者は，ヴェフール[21]，ギャルリー・ド・ヴァロワ，シェ・ボンヴァレ，ブルヴァール・デュ・タンプルや，ブレバン[22] やルドワイヤン[23] で食事をしていた。

「他所にも女はいるが，パリには括弧つきの『女』がいる」とある外人の貴族は言う。「他所ではまあまあ綺麗な女性もパリに来ると魅惑的になるわ，とあるポーランド女性は言う。彼女は理想化され，顔が合成され，体格もつくりかえられるの。」クリノリン（張鋼で張り広げたスカート）を大きく広げた後で，ワース[24] はそれを短くして有名になる。彼はもうスカートを曳きずることをせず，軽い絹のブラウスを採用する。それが「皇后風」で，革ベルトでウエストを締めるコルサージュとなる。17 歳でイフィジェニー役でデビューしたサラ・ベルナール[25] のさや形の婦人服フーローに人々の関心は向いていく。

それは寝室やアルコーヴの女帝たちの時代であり，コラ・パール，その厚かましさがネストール・ロクプランのようなダンディーを楽しませた赤毛の大柄な娘の，ロシヤ人たちを受する（ゾラのナナ[26]）ブランシュ・ダンティニの，リゴルバォクと呼ばれるマルグリット・バデル[27] たちの時代である。

これらの御婦人たちがマビューユ・ダンス・ホールで自分たちの追憶を喚起させに行く

のは，この建物がこれら二流の家系の女王たち[28]のものだったからである。小さな庭園で，「ガス燈が広がる下で，絹の服を着たこれらの蟬たちはロマンスを囁いたり猥らな冗談を小鳥のように囀ったりしている。」「後家さん小路」*allée des Veuves*（モンテーニュ大通り）の奥の木の下にきて，パリはくつろぐのだが，そこは昔タリヤン夫人が支配し，現代では第2帝政のアベックたちがやってくる場所だった。

かつてない程，パリは世界的な都会になり，あらゆる言語が聞ける世界のバベルの塔になった。それは当時特に「アメリカ人の楽園」だった。「良きアメリカ人は，死ぬ時，パリに行く」とは美校の校長で作家のトム・アプルトンの口癖だった。（「アメリカン人ですべての有能な人間は死後パリに行く」）。1867年シャン－ド－マルスで開催された万国博覧会[29]で，男たちは印象的なシルク・ハットを被り，厚手のラシャの燕尾服を着，大きな蝶結びのネクタイをしていた。その年，大賞授賞の日，帝国議会はこれまでにない程，混雑した。議場にはナポレオン3世とロシア皇帝[30]，ベルギー国王レオポルド2世[31]が姿を見せていたのである。ロシア皇帝はナポレオンの右側に立ち頬ひげとブラシのような口髭をつけた肌理の荒い顔を示し，レオポルド2世は右側に立って，グレイの絹服を着て，スポーツマン風の白く細い髭をはやしていた。

それはナダールの時代であり，波打つレースやペチコートに身を纏い幌付き四輪馬車に乗って走るギス[32]の描く女たちの通行人たちの時代である。パリで一シーズンを過ごすロシアの伯爵夫人にとり，ここは「趣味の殿堂」temple du goût なのである。日本人の旅行客は，「官能の風潮，淫靡な快楽の雰囲気を人々が胸一杯吸い込んでいる」のに衝撃を受けた。またドイツのユーモア作家カリッシュ[33]はショルツの戯画入りのパリからシュルツとミュラーまでの旅行記を出版しているが，パレ－ロワイヤルの居酒屋シュヴェやトルトニ[34]を案内してくれ，カフェ・ヴォルテール[35]で「酒呑みの学生」burschtenbinderとして食事をし，リュクサンブール近くの東洋風の装飾をしたホールのビュリエール[36]に踊りに行ったが，そこではオーケストラがカドリール曲「窓ガラスをまた割っちゃった」*Encore un carreau d'cassé* とか「足が動いちゃう」*J'ai un pied qui r'mue* などを演奏していた。そっと姿を消してしまった若い女工たちをそこで探している彼らを見て，親切な娘がウィンクしながら言った。「女はね，煙草製造女工のようじゃないから，また来るわよ！」

街の通りは陽気で，ストリート・ミュージシャンや弥次馬や自分の周囲に人を集める露天商がいた。それから叫び声 —— これはいつもの事だ！ —— この都市の絶えず再

開され増幅されるシンフォニーの叫びがあり，その耳障りな騒々しい歌は車輪の転がる舗道から立ち登るのである。

第 3 共和政[37]（1）

1870 年 9 月 4 日，スダンの敗北を知った一群の労働者や国民衛兵たちはチュイルリ宮に侵入した。「帝政打倒！　共和政萬歳！」　人々は柵の鷲の紋章を引きちぎる。人々は庭園に殺到する。ルーヴル宮の柱廊から強制的に皇后を退去させた後[38]，皇帝の親衛隊を撤退させねばならなかった。（「なんて異常な」とユジェニーは『メデューサ号の筏』*Radeau de la Méduse*[39] を見上げて言ったが，アメリカ人の歯科医エヴァンズ[40] が蒐集する前に彼女が見たこれが最後の画になったのである）。宮殿の外で，柵が群衆に押し倒される。「バダンゲくたばれ！　スペイン女くたばれ！　共和政萬歳！」　それは猛攻だった。

帝国の敗北が明らかになったその日，第 3 共和政が宣言される。すべての政府を常に不信任するという政策をティエールが固持したのは，それらの廃墟が自分の王座に役立つためで，こうして彼は自分が権力の座にいない時は何時も反対党に身を置いていた。この国の新しい主人たちと同盟した紳士全員を前にして，彼は用心深く叫ぶ。「戦闘は反愛国的仕事になるだろう。これらの諸君はあらゆる市民と協力すべきである。」共和主義の興奮の中にあったパリ市民全体が，当時は防衛のみを考えていた事は言っておかねばなるまい。プロシャ軍に包囲されたが，市民たちは自分たちの司令官トロシュ将軍[41] を信頼していたのである。

パリ攻囲[42]

かくてドイツ兵に包囲されたパリ攻囲が始まる。それは苦悩と悲嘆の 5 か月だった。首都は，国家にとり，抵抗の象徴となった。その防衛者たちは，国民総動員と暴力と革命的信念が全てを再び秩序づけて自由を再発見するのに充分だったと確信していたのである。パリは不名誉な休戦を拒否し，愛国心をもって，外敵の侵入に反乱を対置させるようとす

る。

自由，平等，博愛の文字が，すべての公共建築物の上に書かれる。パリは巨大な兵営に変身する。国民遊撃隊が包囲された都市に流入する。大通りは敗北したバダンゲの戯画で覆われる。新聞は，フランスを勝利に導くガンベッタや小人のビスマルク[43]を巨人のジュール・ファーヴル[44]が鎖で縛り上げている漫画を掲載する。トロシュ，希望はトロシュにある！　13 日，首都は砲声で起される。行列が食料品店の前にできる。ガスと石油が不足する。鉄道は切断される。城外の村々は無人になり，森は火事になる。大砲が要塞で咆哮する。寒くなる。要塞群の外側にスダンの残存部隊がいた。要塞群の内側では 200 萬以上の住民がいたが，その中から防衛予備兵の召集がはやくも実施されていた。9 月 21 日，コンコルド広場で，あらゆる講和に反対するデモが行われた。10 月の第 1 週，ガンベッタはトゥールとロワール軍団を合流させパリの包囲を打破すべく，気球で脱出しようとした。[45] 彼はパリ市民の信念を再び強化する。しかしバゼーヌ[46]が降伏しパリの代議士から重要な一軍を奪ってしまう。

配給制はますます厳しくなる。兎一羽が 35 フラン，馬鈴薯 1 キロ 20 フラン，バター 70 フラン。肉は極度に欠乏したため，植物園の動物を屠殺しなければならなくなる。象，カンガルー，縞馬，羚羊を食べてしまった後，人々は犬や猫や鼠まで殺さなければならなかった。食堂の前には長い長い行列ができた。指揮下の国民衛兵部隊や遊撃隊を活用しない事を非難して，人々はトロシュ将軍を恨むようになる。パリ地区司令官は，この種のすべての防衛は，「英雄的狂気」héroïque folie にしかすぎない事を知っていた。しかしこれらの兵士を大事にすることにより，彼は人々に自分たちは裏切られたのだ，という印象を与えてしまう。

1871 年 2 月 17 日，今やボルドーに退避し特に王党派から構成されていた国民議会により，アドルフ・ティエールは共和国行政府長官に任命された。[47] ある人々は，眼鏡をかけ燕尾服を着たこの小男が，1830 年にはブルボン家を，1848 年にはルイ‐フィリップの政府を，1851 年には第 2 共和政を転覆させたのに寄与した後で，第 2 帝政を否認するのを見て驚くのである。しかし，ティエールは，フランスにおいて，ビスマルクに対抗できる唯一の政治家ではなかろうか？　ほとんどすべての政党のカラーを纏って，彼は選挙民の大多数の票を獲得する。彼は「自由派」なのである。彼は狂信者たちに立ち向い，また常に愛国者であり続けて極左極右の両派から大きく距離を置く事ができる人物である。

しかしながら，国民衛兵への給与の廃止や，家賃や借金の支払い命令と同じく，もはや

パリではなくヴェルサイユに移転するという閣議決定[48]（その時までティエールと各省大臣はパリに留まっていた）のため，落胆の気持が極度に興奮していた人々を捕え始めた。ヴェルサイユの和平予備交渉で，アルザス‐ロレーヌの放棄と 70 億フランの賠償金の支払いの条件で結論がでていた。

これらの処置は人々を激昂させ，ドレクリューズ[49]，ブランキ，ピヤ[50]，フルーランス[51]といった反乱分子たちと人々を合流させるのである。数か月前から，これらの反乱分子たちは，ティエール氏の政府は自分たちを裏切っていると称して，自治政府の樹立を試みていた。かくして 3 月 1 日，ビスマルクがエトワール広場の凱旋門の下で演奏される「ラインの衛兵」*Wacht am Rhein* を聞くため来訪した時，首都を砲撃した後に入城し，皇太子の指揮の下にドイツ皇帝の前を更新したプロシャ兵に対し，商店は店を閉じたのである。2 日後，自分たちの勝利が招いた危険を予知したかのように，彼らは去っていった。

（続く）

パ　　リ
—— 誕生から現代まで ——
（訳　注　XXVI）

1）Eugène‐Marin Labiche（1815－1888）：パリに生れパリに死んだ生粋のパリっ兒。第2帝政期と第3共和政初期のプチ・ブルジョワ階級の風俗，趣味，悪癖，滑稽さを繊細な観察で舞台に乗せ，観客を陽気な笑いに誘い，約40年間に渡って，ヴォードヴィルと喜劇の流行作家として劇壇に君臨した。しかしこの手放しの愉快な哄笑の底に，人間性の真実を垣間見させる一瞬がある。多くの共作者，デマノワール（1806－65），クレールヴィル（1811－79），ゴンディネ（1829－88），オージェ（1820－89）らの協力を得て300本余の作品を創作，そのうちの何本かは今日でも上演され，観客を楽しませている。本文中の『ペリション氏のイタリヤ旅行』はエドワール・マルタン（1828－66）との共作の4幕喜劇（1860）でジムナーズ座で上演され大成功を博した。馬車製作で富裕になったペリション氏が念願のイタリヤへの家族旅行中に体験する氷河での事故をめぐる事件を中心に，劇は展開する。娘アンリエットに恋心を抱く2人の青年の行動とペリション氏の気持の変化が滑稽に描かれ，観客の笑いを誘った。他の代表作として『イタリヤの麦わら帽子』*Un chapeau de paille d'Italie*（1851）などがある。プチ・ブルの市民の戯画を舞台に描いて劇壇のドーミエと呼ばれた彼は，1880年アカデミー・フランセーズ会員に選任された。

2）Alfred Delvau（1825－1867）：少年時代は放任され放浪兒然とすごし，パリの庶民生活の経験を積んだ。ルドリュ‐ロランの秘書を暫く務めた後，文筆生活に入る（1848）。現代政治史，イタリヤの動乱，1848年の2月革命などに関心を持ったが，騎士道物語やポルノ文学にも触手を延ばした。しかし最も得意とするのは同時代のパリ市民風俗で，彼はそこに粋な主題を発見している。『グリゼット盛衰紀』*Grandeur et décadance des grisettes*（1848），『パリの裏側』*Les Dessous de Paris*（1860），『パリのカフェとキャバレーの逸話史』*Histoire anecdotique des cafés et cabarets de Paris*（1862），『パリの楽しみ』*Les Plaisirs de Paris*（1867）などの著作がある。

3）Jacques Offenbach，本名Jacob Levy Eberst（1819－1880）：ケルン生れで，父はケルンのユダヤ教会の聖歌隊員だった。パリに上京（1833），コンセルヴァトワールでチェロを学ぶ。チェロ奏者としてオペラ‐コミック座のオーケストラに入団，やがてコ

メディー－フランセーズの楽長に就任する（1847）。1855 年にブッフ－パリジャン座を創立し自作を上演するようになる。1866 年以降はヴァリエテ座，パレ－ロワイヤル座でも指揮をした。生きる喜びを謳歌する彼の陽気で軽快なメロディーは，独創的な空想とパロディーに満ちた喜劇的な台本を書いたメイヤックとアレヴィの協力を得て，第 2 帝政時代のブルジョワ階級の安逸で官能的な風俗をオペレッタに反映させたのである。『地獄のオルフェ』*Orphée aux enfers*（1858），『美しきエレーヌ』*La Belle Hélène*（1864），『パリ生活』*La Vie parisienne*（1866）などが代表作だが，これらの成功も主演した歌姫オルタンス・シュナイダーの好演に依る所が大きかった。最後の傑作『ホフマン物語』*Les Contes d'Hoffmann*（1881）は，彼の死後に上演され，パリ市民に追悼の念を抱かせた。

4）Hortense Schneider（1833－1920）：アルザス出身の仕立屋の娘の彼女は，1855 年にオッフェンバックの経営するブッフ－パリジャン座でデビュー，聴く者を恍惚とさせる美しいソプラノと天性の美貌と見事な演技力で，忽ちオペレッタの女王になった。オッフェンバックは彼女のために多くの作品を書き，いずれも成功している。彼女はその後もオッフェンバックと行を共にし，ヴァリエテ座，パレ－ロワイヤル座に出演。この作曲家の名声を高めるために大きな貢献をしている。得意の出し物は『美しきエレーヌ』，『ジェロルシュタイン大公妃』*La Grande Duchesse de Gerolstein*（1867）である。メイヤックとアレヴィ共作の台本をオペレッタにした『ジェロルシュタイン大公妃』は，ヴァリエテ座で 1867 年 4 月 12 日に初演されたが，その晩はパリ中の演劇愛好家がつめかけ，大入り満員となった。18 世紀の假空の国ジェロルシュタインの宮廷で展開するこのオペレッタに，当時のロシヤ宮廷とその宮廷を支配するエカテリーナ女王のパロディーを見て観衆は大いに笑いやんやの喝采をしたのである。気品と威厳を保ちつつ笑いを誘うという困難な役をシュナイダーは見事に演じきった。この年は万博の年でもあった。

5）Café Riche：第 2 区のイタリヤン大通りには，当時有名なカフェが軒を列ねていたが，これもそのうちの一軒で，16 番地にあった。現在では商工業銀行が立っている。銀行ができる前に此処に徴税請負人ラボルドなる人物の館があり，この邸に 1804 年頃から Café Riche が開店したという。Riche は所有者の名前である。このカフェは大変有名で，「アルデ（これも当時の有名なカフェ）でディナーを食べるには金がたっぷり必要だが，リッシュでディナーを食べるには胆っ玉が必要だ」と言われていた。しかし第 2 帝政期になると，レストラン・リッシュは「気のおけない友人たちを連れていく経済的なカフェ・アングレ」となってしまうが，1865 年頃に再び盛り返したのは，カフェ・フォワを兄弟

で経営していた兄のビニョンがこの建物を近代的に改造してからである。

6）Nadar，本名 Félix Tournachon（1820－1910）：医学を学ぶためリヨンから上京した彼は間もなく文学に転向し，ナダールの筆名で中編小説や劇評を発表した。1849年『レヴュ・コミック』*La Revue comique* 誌と『お笑い小新聞』*Le Petit journal pour rire* 紙をを創刊し，また写真工房を開設，1854年から当時の有名な政界人や作家芸術家の肖像写真を *Panthéon Nadar* のタイトルで刊行し始めた。ゴーチエ，デュマ・ペール，ラシェル，ジョルジュ・サンド，ボードレール，サラ・ベルナールらの貴重な映像が残されている。1863年気球巨人号に乗り，始めてパリの航空写真をとったのも彼であった。その後も何度も首都の上空に舞い上ったが，その記録が『巨人号の想い出』*Mémoires du Géant*（1864）である。また年代記作者としては興味深い資料『私が写真家だった時』*Quand j'étais photographe*（1900）を書いている。彼はまた印象派の後援者で，彼らの第一回の展覧会場にカプシーヌ大通りとドヌー街の角にある自分の工房を貸している。

7）Léon Gambetta（1838－1882）：フランスにジェノヴァから移住した移民の子。法律を学ぶため上京，弁護士になるや共和派の反政府分子の弁護で名を馳せた。なかでもボーダンの記念碑建設募金に関してジャーナリストのドレクリューズ（1735－1816）裁判での猛烈な政府攻撃と情熱的な弁論で有名になる。1869年マルセーユとパリの下町のベルヴィルの選挙区から代議士に選出された。立法議会においてはティエールを支持しプロシャへの開戦に反対したが（1870. 7 .），戦時公債の発行には賛成した。スダンの敗北により第3共和政の樹立に努力，国防政府の内相として徹底抗戦を主張，プロシャ軍に包囲されたパリから気球に乗って脱出（10. 7 .），トゥールを中心に反攻の軍団を組織しようとした。穏健派と王党派によりなる政府が講和を急ぎ，アルザス，ロレーヌ両州を割譲した時，彼は再選された議員の職を数人の同志と共に辞職したが，ユゴーもその一人であった（1871. 3 . 1 .）。71年7月に再選され共和派左派の領袖としてティエールと共闘，『フランス共和派』*La République Française* 誌を創刊（1871.11.），共和主義と政府攻撃のキャンペーンを再開した。彼は地方遊説を行い，農村や市町村の中産階級を味方につけ共和主義の支持者に変えて行った。王党派と「道徳秩序」派の協力で選出されたマクマオン大統領に反対し，大統領権限の改正，普通選挙制の導入，二院制の採用などを盛った憲法を成立させた（1875）。マクマオン辞任後，新大統領となった共和派のジュール・グレヴィの下，下院議長になり（1879），1881年8月から9月にかけての選挙で共和派が議席の80パーセント以上を占める大勝利を得てガンベッタは首相となり，強力内閣の実現を目指し

たが（1881.11.14.），選挙法改正案をめぐって左右両派から攻撃され，僅か 2 箇月で退任しなければならなかった(1882. 1 .26.)。その数か月後，パリ南西ナンテール郡のヴィル - ダヴレ町にある Villa des Jardies に滞在中，拳銃の手入れ中に誤って手に負傷，その後の治療が悪くて敗血症にかかり急逝してしまった。44 歳の若さであった(1882. 12.31.)。

8 ）théâtre des Bouffes-Parisiens：第 2 区のモンシニ街 4 番地にある。この劇場の前身は，1809 年に医者で腹話術師・手品師のルイ・コントが自分の手品の弟子たちのために，当時のグルネル - サン - トノレ街（現在の第 1 区のジャン - ジャック - ルソー街 41 番地から 51 番地）で手品の教室を開いたのが始まりである。彼は弟子たちの業をサン - トノレ街のシルク・ホールで披露したが，これが当ったので専用の芝居小屋を建築する計画を立て，1818 年に第 2 区のパノラマ通り passage des Pnorama に小さな芝居小屋を建築，「若手座」théâtre des Jeunes-Acteurs と命名した。1826 年にショワズール通りに移転したが，新築の劇場の入り口はモンシニ街に開いていた。柿落としは 1827 年 1 月 23 日である。後に名優となった役者たちもこの劇場で修業している。1846 年の法令で 15 歳以下の子供の出演が禁止されたので，コントは演し物を変えなくてはならなくなった。この劇場を彼の息子シャルル・コントが支配人している時の 1855 年 6 月 15 日，オッフェンバックが営業権を入手，建築家テオドール・バリュ（1817－1855）に依頼し，拡張工事と豪華な装飾を施工し，ブッフ - パリジャン劇場として賑々しく開場したのが 1855 年 12 月 29 日であった。演し物はオッフェンバック作曲，アレヴィ作詞の中国風ミュージカル *Ba-ta-Clan* である。この劇場で彼の傑作『地獄のオルフェ』『パリの生活』などが上演された。オッフェンバックはこの劇場を 7 年間使用するが，劇場は 1863 年に取り壊され同じ場所に新築される。これ以後，1879 年，1960 年と改築され現在に至っている。

9 ）théâtre des Variété：1806 年 6 月 8 日のナポレオン 1 世の布告により，この劇場はパレ - ロワイヤルから退去しなければならなくなった。支配人モンタジェ嬢は当時パノラマ園と呼ばれていた土地の地主に了承を得て此処に新劇場を建設する事になる。そこは現在のパリ第 2 区モンマルトル大通り 7 番地である。1807 年 6 月 24 日に柿落しで Désaugier 作のヴォードヴィル *le Panorama de Momus* で開幕した。座席数 1.600 でオーケストラ・ボックス前の最上等席は 3.6 フラン，階段桟敷の最後列の席は 1.25 フランだった。ドタバタ喜劇を賣り物にしていた。1829 年以降，真面目な芝居を上演しようと方向転換をはかったが，デュマ・ペールの『キーン』*Kean*（1836. 8 .31.）が成功したにすぎ

なかった。そこでまた元に戻り気のきいた軽喜劇を専門にし，Jenny Vertpréなどが人気を得た。この劇場が繁昌したのはオッフェンバックのオペレッタを上演してからである。オルタンス・シュナイダー主演の『美しきエレーヌ』は大成功を博したが（1864 年 12 月 13 日初演），それにまさる大好評を得たのが，パリで万国博覧会が開催された 1867 年に上演された『ジェロルシュタイン大公妃』である。主演のオルタンスの楽屋には万博見物にパリを訪れた各国の元首たちが立ち寄り，賞賛と花束と贈り物で彼女を包み込んだという。この後も名優が多数出演し，ナポレオン 1 世，ルイ 18 世，シャルル 10 世，ルイ‐フィリップらも来場し観劇を楽しんだ。

10）théâtre de Palais-Royal：第 1 区モンパンシェ街 38 番地にある。最初はルイ 14 世の弟オルレアン公の 3 男ボージョレ伯爵アルフォンス‐レオドガール（1779－1808）が子供の時の 1873 年に人形劇のための小劇場である。ボージョレ劇場といったが，1790 年に 57 萬フランでモンタジェ嬢ことマルグリット・グリュネが購入した。この劇場を建築したルイは増築して座席を 1.300 に増加させた。当時 59 歳だったモンタジェ嬢はフォンテーヌブロー，サン‐クルー，ヴェルサイユでも劇場を経営していた敏腕の女興行主だった。したたかな彼女は結局代金を支払わなかったのだが，新しく入手したこの劇場を théâtre Montasier と命名，1790 年 4 月 12 日に開場する。賣春婦たちも入場できたので，彼女たちの魅力が多くの観客を引きつけ，客寄せに大いに役立った。実は彼女は所有しているモンパンシェ回廊の 17 軒のうち 2 軒を賣春宿に貸していたのである。恐怖政治時代に逮捕投獄されるがバラスの口利きで無事釈放され，1795 年に劇場経営に復帰する。大革命時代に 2 度名前が変るが，1795 年からヴァリエテ座となり大いに人気を博した。しかしコメディー‐フランセーズのすぐ隣にあるので，ナポレオンが移転を命じ，ここからモンマルトル大通りに移転したのは前の注の通りである。しかしナポレオンは小さなホールでの興行は認可し，パレ‐ロワイヤル・ホールとして人形劇や学者犬，綱渡りの芸人が出演することになる。1814 年から 18 年の間は Café Montasier，後に Café de la Paix として営業していたが，ナポレオン派対王党派とプロシャ士官たちの大乱闘があり，店に大損害を与えた。劇場は 1831 年 6 月 16 日に再開した。名女優デジャゼ嬢やオルタンス・シュナイダーなども出演し，劇場の名声をたかめた。

11）théâtre Folies-Dramatiques：タンプル大通りの偶数番側に立ち並んでいた劇場の一つで，この劇場が開場する 1831 年 1 月 29 日までに幾つかの劇場が営業していたが，移転したり焼失したりして空き地になっていたのである。名優フレデリック・ルメートル

の演じたロベール・マケールで大当たりをとり，以後この劇場の地位は不動のものとなるが，1862 年に取り壊され，ボンディ街（現在のルネ - ブーランジェ街 40 番地）に移転する。1862 年 12 月 30 日に柿落しをし，オペレッタ『アンゴ夫人の娘』*La Fille de Madame Angot*（1872. 1 .21.初演）や『コルヌヴィルの鐘』*Les Cloches de Corneville* で成功した。現在は映画館になっている。

12）théâtre de la Renaissance：第 3 区サン - マルタン大通り 20 番地にある，最初のルネサンス座はジョイの劇団がヴァンタドール・ホールに 1838 年に設立した。2 番目はカルヴァロが監督した劇団で同じ場所に出来たが長続きしなかった。3 番目は現在の場所に開場するが，パリ・コミューヌの乱の際に焼失（1871. 5 .），4 番目のルネサンス座が同じ場所に建築家ラランドにより新築された。座席数 1.200，入場料は 1 フランから 10 フランまで。1873 年 3 月初旬 Bellot 作の *La Femme de feu* で開幕した。オペレッタを上演しジャンヌ・グラニエもこの劇場でデビューしている。オッフェンバック生前最後の作『美しきリュレット』*La Belle Lurette*（1880.10.）も上演された。1893 年から 99 年にかけサラ・ベルナールが監督し，ミュッセ作『ロレンザッチョ』の他ロスタン，ダヌンチオ，モリエールらの作品を演じた。1942 年にこの劇場は取り壊された。

13）Henri Meilhac（1831－1897）：生粋のパリっ兒で高等中学卒業後，書店に務めながら挿絵を描いていたが，1855 年にパレ - ロワイヤル座で自作の喜劇が上演されて以後劇作に没頭。特にリュドヴィック・アレヴィとの共作が多くの成功をもたらした。オッフェンバックの成功したオペレッタ『美しきエレーヌ』『パリ生活』『ジェロルシュタイン大公妃』『ラ・ペリコール』などは 2 人の共作脚本である。彼らの創作喜劇『フルフル』*Froufrou*（1869）は真面目な風俗問題を取り上げている。しかし彼が生産した多くのオペレッタ，ヴォ―ドヴィル，コメディーは第 2 帝政時代のブルジョ階級を空想で味つけして愉快に楽しく笑わせる健全娯楽の作品であった。

14）Ludovic Halévy（1834－1908）：彼も生粋のパリっ兒で伯父のジャック・アレヴィ（1799－1862）は有名な音楽家である。劇作家である彼はまたエコル・ポリテクニックの文学教授も務めた。メイヤックとの共作で，オッフェンバックのオペレッタの成功をもたらしたのは前項の通り。特に『パリ生活』は第 2 帝政末期，全ヨーロッパをパリに誘引した夢の時代を描いた特色ある作品であった。彼一人の作品として小説『コンスタンタン神父』*L'Abbé Constantin*（1882）や『カルディナル夫妻』*Monsieur et Madame Cardinal*（1873）などがある。ビゼーの『カルメン』*Carmen* もメイヤックと脚本にし

ている。1884 年ドーソンヴィル伯爵（1898－1884）の後任としてアカデミー・フランセーズの会員に選出された。

15）Gustave Nadaud（1820－1893）：作曲家，シャンソン作家。約 300 篇のシャンソンを作詞，そのうちの 100 篇ほどを作曲している。彼は自作のシャンソンを 1849 年から 52 年，62 年，70 年と 4 回に分けてアルバムとして発行し，後に全 3 巻の豪華版を刊行した（1879－1880）。最も愛唱されたシャンソンは『二人の憲兵』だが，その他にも『マビーユの女王たち』*Les Reines de Mabille*，『グレゴワール博士』*Le Docteur Grégoire*，『別れのワルツ』*La Valse aux adieux* などがある。この他に小説 *Une idylle*（1862），*Contes, proverbes, scènes et récits en vers*（1870）を残した。

16）Moulin de la Galette：モンマルトルの丘にあった風車の一つ。現在では第 8 区のジラルダン街とルピック街の角のキャバレーの屋根に残っているが，昔は製粉のため多くの風車が林立していた。それぞれの風車は転賣や相續により所有者が変った。1809 年にニコラ - シャルル・デブレがブリュト - ファンとラデという 2 つの風車を取得，このラデ風車が後にガレット風車と呼ばれるようになる。この周辺の土地を遊園地と野外ダンスホールにして，パリ市民を招いたが，特設されたブランコがお転婆娘たちの愛好する所となった。ルノアールはこの風景を『ブランコ』（1876），『ムーラン・ド・ラ・ガレット』（1876）という名画に残している。

17）Champfleury，本名 Jules Husson（1821－1889）：ピカルディー地方エヌ県ランに生れた彼は田舎の小都市のつまらなさと市役所職員の父と小さな玩具店をやっている母の退屈な家庭に愛想が尽き，パリに逃げだした。一時帰郷するが再び上京，ミュルジェールと同居しボヘミヤンの小説家志望の青年や画家の卵たちと交際する。このボヘミヤンたちの生活を描いた自費出版の短篇集の一冊 *Chien-Caillou* がユゴーやボードレールに賞賛され，文壇に登場する。1847 年には文芸家協会に入会，*L'Artiste* の編集長ウーセーに勧められ，シャンフーリの筆名を名乗った。現実を写真のように正確に描写する「誠実な文学」を目標とした彼は画家クールベと共に写実主義運動の中心となり，オートフーユ街のビヤホールを根城に大いに気勢をあげた。彼はクールベの影響で民主主義に賛同し，上級階級よりも庶民階級に理解してもらうよう，単純明快な文章で現実をありのまま描くように努力した。彼の努力は『モランシャールの市民たち』*Les Bourgeois de Molinchart*（1855）に結晶，この作品は 10 万部を賣るベストセラーになった。しかしプチ・ブルたちの滑稽な欠点を鋭く描写していたが，時に余りに戯画化されすぎ，真実味がなくなって

いたため，リアリズムの領袖の地位はフロベールに譲らざるを得なかった。やがて興隆してきた自然主義に馴染めず，文壇から孤立し，新しい文学思潮の批評家からは，マンモスのマストドンの遺骨だと酷評された。

18）Charles Méryon（1821－1868）：フランスの彫刻家。船員となって 1845 年ニュー・カレドニアに寄港，当時ヨーロッパにほとんど知られていなかったこの地の風景をスケッチし，これは後にエッチングなどの作品になる。帰国後は健康上の理由で船員を断念，趣味だったエッチングの技法をブレリーに学ぶ。彼の才能も作品もしかしながら認められず，人嫌いとなり貧窮のどん底に落ちこみ，やがて神経を病むようになる。シャラントンの精神病院に収容され，友人も食物を受けつけず死亡した。彼の作品は，その天才的集中力から生れ，繊細さと力強さが見事に調和しレンブラントを想起させるものがある。特に古いパリの黒く汚れた記念建造物や埃まみれの家々を画く時，その彫刻の男らしい逞しさはレンブラントを凌ぐとさえいえた。狂気の発作に駆られたある時，彼は数時間にわたって自作を破壊してしまった。その中に彼の傑作の一つでアンリ 4 世校を描いた作品があり，極めて残念な悲劇であった。彼の幻想的でロマン派的作品はボードレールにも影響を与えている。作品に『両替橋』『古い屍体置場』*la Vieille Morgue*,『プティ－ポン』『ポン－ヌフ』などパリの記念建造物や町並を描いたものが全部である。

19）Louis-François Veuillot（1813－1883）：フランスの教皇至上権主義者のカトリック作家。1827 年春 13 歳の時に勤め先の主人の兄が高名な作家カジミール・ドラヴィーニュだったので，彼に触発され文学者たらんとして独り勉学に励んだ。ドラヴィーニュの家によく来ていたアンリ・ド・ラトゥーシュの紹介で「フィガロ」紙に論説を発表した。1831 年 9 月にルアン市の地方紙に入社，文学，音楽，美術，政治などの時評を執筆したが，その内容から 2 度の決闘を行っている。ビュジョ将軍に招かれ，将軍の新聞 *Mémorial de la Dordogne* 主筆となり（1832.12. 2 .），ペリグーに赴任，その地の正統王潮派と共和派の発行する 2 紙と論戦，ここでも決闘騒ぎを起すが，やがて年齢と教養が練達の文章を書かせるようになり，ピストルを手にすることはなくなった。

1832 年の末頃，ギゾーが新しい人材で新聞を刊行するとことになり，その編集者の一人にペリグーの論争者の彼をスカウトした。ヴィヨはここでパリのジャーナリズム世界の実状，可成りペシミスティックで節操の無い世界を知るのである。彼はその後いくつかの新聞を渡り歩き，「デバ」紙に在職した時，友人に誘われイタリヤに赴いた。此処で彼はカトリック信仰に帰依する（1837）。この回心が彼の人生の一大転機となった。それまで

宗教などに無関心だった彼は熱烈なカトリック信者に変身，教皇至上権主義者として，カトリックに反対して教皇の無謬性を批判する無信論者，自由主義者，共和主義者に対し猛烈な反論攻撃を開始するようになった。しかし彼の強固すぎる信念から発せられる言辞はカトリック内部の穏健な良識派を離反させてしまい，親友だったモンタランベールらとの間に溝ができてしまった。また彼の攻撃にさらされたファルー文相の動議により，ヴィヨの機関紙 *L'Univers* は発行停止となり，禁錮 1 か月の判決が下されコンシェルジュリ刑務所に投獄されたのである。明晰な思想と信念を力強い文体で表現する，これこそ彼の目的とした所で，最も溌溂とした機智から発せられる皮肉と諷刺は彼の論争の中に横溢している。また彼の鋭敏な感受性は人々の内なる魂に共感し，犯罪と悪徳に激しく怒り，情熱をこめてこれらを時には微笑を浮かべながら，時には皮肉たっぷりに，時には雄弁に記述している。代表的な宗論は『サ・エ・ラ』*Ça et là*（1859），『教皇と外交』*Le Pape et la Diplomatie*（1861），詩集に『幸福』*Les Bonheurs*（1869），評論に『ユゴー論』*Étude sur Victor Hugo*（1885），紀行記に『スイス巡礼』*Les Pélerinage de Suisse*(1839)，ルポルタージュに『パリの臭い』*Les Odeurs de Paris*（1866），『 2 度の包囲下のパリ』*Paris pendant les deux siège*（1871），その他に小説，劇評など多数あり，全 14 巻の全集に収録されている。

20）*Olympia*：1865 年 6 月の「サロン」で展示を拒否されたマネ（1832－1883）の作品。彼は 1863 年にも「草の上の食事」*Le D'ejeuner sur l'herbe* も「サロン」から出品を拒否された前歴があり，この新作を前にした批評家たちは全く反省をみせず懲りない不逞の輩としてマネをさらに烈しく非難攻撃した。「この黄色の腹をしたオダリスクは一体何なのか？　何処かわからぬ所から探してきた醜いモデルがオリンピヤを現わしているというのか？」とはその一例である。女体の理想像を美とする従来の批評家にとり，女神でなく同時代の娘を因襲に捕われずに描いたこの作品のもつ色彩の豊潤さ，構図の新鮮さは全く見えなかったのである。一般の人々の大部分も盲目だった。マネの独創的天才が理解されるにはなほ時期尚早だったのである。この作品は現在ルーヴル美術館に展示されている。

21）Véfour，通称 le Grand-Véfour：第 1 区のパレ - ロワイヤルの正面奥のボージョレ街に面した回廊の 79 番地から 82 番地にあった Café de Chartres をヴェフール兄弟の兄が購入しレストランに改造した。ミュラ将軍や探険家フンボルトも通ったが，その当時も 1740 年頃からのメニュと同じでパーミセリ入りスープ，羊の胸肉，隠元豆だった。ここの常連の多くは有名人で，ベリー公，ラマルチーヌ，ティエール，サント - ブーヴ，マ

ク‐マオン，オルレアン公，ジョワンヴィル皇子，オマール公など。この店の 2 階から 1790 年 10 月 1 日より劇場に直通の通路が完成し，モンタジェ嬢のアパートがあった。彼女のサロンにはバラス，ローザン公，ロベスピエール，ダントン，マラー，オルレアン公，カミーユ・デムーラン，アンドレ・シェニエ，タリヤン，クートン，ボナパルトも常連だった。彼女は 1820 年この家で 90 歳の長寿を完うして大往生する。愛人関係にあったバラスの部屋は 3 階で，螺旋階段が 2 人の部屋を繋いでいた。

22）Brébant：第 2 区のポワソニエール大通り 32 番地，1660 年に大理石墓石業者ニコラ・ドゼーグルが建築した美邸が，その後何度か転賣され，1780 年頃カフェとなり，この店も何度か経営者と名前を変えている。最後の所有者になったオブリがレストランに改造し，ブレバンが誕生する。この店は第 2 帝政期に大いに繁昌し，特に有名人の夜食の会が開催され，作家たちがよく集まった。Dîners des Spartiate はゴンクール兄弟により開設され，後のゴンクール賞選考委員会のメンバーが参加した Dîners du Bœuf Nature はゾラ，ドーデ，フロベール，コペ，ブールジェ，ミルボーらがメンバーで，1877 年 4 月 16 日の自然主義誕生の契機となる。Dîners des Rigobert は画家たちの集まり，Dîners Bixio は実業家や経済界の人たちの会だったが，メリメ，サント‐ブーヴ，デュマ・ペール，サルドーらも出席している。Dîners Magny はサント‐ブーヴの肝煎りでつくられた。

23）Ledoyen：第 8 区のシャン‐ゼリゼ大通りのロン・ポワンの奥の木立に囲まれた店で，現在でも盛業中である。しかし創設の頃はシャン‐ゼリゼ庭園の中にあった縦横 13 米と 4 米の可成りみすぼらしい宿屋で全体が白ペンキで，窓だけは緑色に塗ってあった家だった。持主のミシェル・ルドワイヤンがこの家を年 1.200 リーヴルでデマジュールなる人物に貸し（1791. 8 . 4 .），彼は 99 年に買取って改造しレストランを開業した。シャン‐ゼリゼの道が当時は大変な悪路だったも不拘，ロベスピエール，サン‐ジェストら国民公会の大物が贔屓にして常連客となった。政治体制が変ってもそれぞれの支配階級が上客となったから，勢い食事は金に糸目をつけない豪華なものになり，当然それらを作る料理人たちも一流の腕を持った者たちだった。第 2 帝政期にはナポレオン 3 世が皇后ユジェニーと一緒によく来店したという。

24）Charles Frédéric Worth（1825－1895）：イギリス生れの服飾デザイナー。ロンドンで修業した後，1846 年にパリに上京，絹製品の店で働いた。1858 年に独立して rue de la Paix に自分の店を持ち，シーズン毎に新作のコレクションの発表会を開いた。新

作のドレスをモデルに着せてお客に見てもらうという新機軸を打ち出し，宮廷お抱えのデザイナーとなり，ユジェニー皇后やメッテルニヒ公妃の後援を受け，全ヨーロッパ的名声を博した。彼はその死までモード界を支配した（1895）。普仏戦争後は 2 人の息子も彼に協力，ワース商会は 1952 年まで繁昌したが，Paquin と合併し Worth-Paquin 商会となったが不運にも失敗し，2 年後に閉店してしまった。

25）Sarah Bernhardt，本名 Rosine（1844−1923）：ラシェル（1820−1858），レジャーヌ（1857−1920）とならんで 19 世紀フランスの三大悲劇女優の一人。1858 年コンセルヴァトワールに入学，悲劇喜劇部門で二等賞を獲得，コメディー‐フランセーズの『イフィジェニー』でデビューしたが（1862），全く認められず，ジムナーズ座，ポルト‐サン‐マルタン座などの空想的な役で注目され始め，オデオン座のコペ作『通行人』*Le Passant* で好評を得，ユゴー作『リュイ・ブラス』の女王役で名声を確立，コメディー‐フランセーズに凱旋した（1872）。ここで彼女は世界的人気を博し，全ヨーロッパ及び南北アメリカを巡演，各国で絶賛された。1893 年彼女は独立してルネサンス劇場の支配人になり，1897 年にはシャトレ広場に自分の名を冠した劇場を設営し，演劇興行にも才腕を揮った。ラシーヌの古典劇フェードル，ユゴーのロマン派劇『エルナニ』のドニャ・ソル，デュマ・フィスの『椿姫』のマルグリット，またシェイクスピアのハムレットまで多種多彩な役を見事に演じた。さらに 1900 年 56 歳の時にロスタン作の『鷲の子』*L'Aiglon* のナポレオン 2 世となる筈だったライヒシュタット公フランソワ・シャルル・ジョゼフ・ボナパルト（1811−1832）も演じたのである。足の切断手術を受けるに及んで（1900），彼女は遂に引退を決意した。

26）Nana：ゾラの作品集『ルーゴン‐マッカール双書』の第 9 作の同名の小説の主人公。第 7 作『居酒屋』*L'Assommoir* の主人公アル中の職人クーポーと洗濯女ジェルヴェーズを両親にする。下層社会の活力と欲望を詰めこんだ素晴らしい肉体と美貌を武器に，次々と男たちを堕落させていく悪女として登場する。しかしその悪女の假面の下に純情な心を隠し持っている高級娼婦であり，聖母と悪女の 2 面性の女性像は，自然主義作家のゾラの内に底流となっているロマン主義的感受性が描かせたものである。花形女優となり社交界の人気者として豪華な生活を送った彼女が最後は安ホテルの一室で不倫の子から感染した天然痘で死んだ日は 1870 年 7 月 19 日，プロシャへの宣戦布告でフランス全土が興奮の坩堝の中にあった日である。これは第 2 帝政の崩壊の序曲であり，ナナの死はこの社会の死の予告であったのであった。

27）Marguerite Badel は当時の有名なダンサーで，彼女の回想録 *Mémoire de Rigolboche* によると，粋な若者にダンスに誘われた時，「お父さんのリゴルボォク氏はお元気ですか？」と訊かれたという。若者は彼女を軟派しようとしてこんな嘘をついたのだが，この奇妙な名が彼女の気に入り，芝居の主人公にこの名をつけ演じた所，大好評になり，パリの小粋で陽気な娘たちを指す言葉になった。

28）シャンソンの作者でギュスターヴ・ナドー（1820－1893）の作に『マビーユの女王たち』*Les Reines de Mabille* がある。

ポマレ，マリヤ，
マガドールとクララ，
恍惚とした私の眼前に
現れるのだ，美の女神たちよ。
土曜日にマビーユの庭で，
お前たちは遊び浮かれるのさ；
そこで誰もが味わうのさ，穏やかな喜びと
賣り買いすることのない快楽の数々を。

最初の 4 名はこのダンス・ホールのスターで，この他にもリゴルボォクことマルグリット・バデルがいる。男性のダンサーは，シカール（本名ルヴーク），ピシャール，ブリディディ（本名ポール・ピストン）らがいた。

29）L'Exposition Universelle：1867 年の万博は，1855 年に開催された第 1 回に続く第 2 回目の開催である。第 1 回の万博の成功は，ナポレオン 3 世の第 2 帝政の勢威を内外に宣伝するのに大いに役立った。今回はその権威が国内の経済不振からのストライキの頻発などによって揺いできたため，その打開策の一手段として産業発展の実態を内外に紹介し，人心の安定と帝政への信頼獲得を企図したのである。4 月 1 日の開会式に皇帝自ら出席し，盛会を祈願した。52.000 点に及ぶ展示品の中で皇帝が最も注目したものは，今回初めて一般に紹介される新しい金属アルミニュウムであった。開会式はリヨンの織物工のデモで一時騒然とする。女性の服装が単純化され従来のように多くの布地を必要としなくなったため，彼らは長いスカートを返せ，と気勢をあげたのである。デモ隊のこの要求に，女性のモードは皇帝といえど規制できない，とナポレオン 3 世が答え，周囲の微笑を誘った。更に 6 月にはロシヤのアレクサンドル 3 世，プロシャのウイルヘルム国王の見学が予定されていた。占い師たちは真の平和の世紀が実現する，と予言したが，これが全く誤り

である事は僅か4年後に判明するのである。パリ万博は，1878年，1889年，1900年，1937年と開催され，その度にエッフェル塔（1889），アレクサンドル3世橋とグラン，プチの2つのパレ（1900），シャイヨー宮（1937）などの記念建造物が建設されている。

30）Alexandre Ⅱ（1818－1881）：父王ニコライ1世の後を継いで即位した時（1855.3.2.），セバストポールが陥落した直後であった。彼はパリ条約（1856.3.3.）を締結しクリミヤ戦争を収拾し，この敗戦の大きな原因は，国内の政治的社会的無秩序にあると考え，これを解決するために諸々の改革に乗り出した。農奴解放，都市自治体の改正，裁判の近代化，国民皆兵制の実現などを目指したが，皇帝の独裁権力はそのままだったため，ポーランドの叛乱に当って極端な弾圧を強行した。この強権的反動政策はポーランド国民への国際的救援運動を誘発し，国内ではかかる絶対君主を打倒しより民主的な政権の樹立を企図する革命派のグループを誕生させた。秘密警察とスパイ網によるこれらのグループの摘発とその後の残虐な取り調べは，革命派の怒りを激発させ，皇帝暗殺の陰謀が計画される。何度かの失敗の後，1881年3月13日，アレクサンドル2世が愛人のカトリーヌ・ミハイロワナの住む邸宅に行く途中，革命派のテロリスト「人民の意志」Narodnaia volia の青年が投じた爆弾により爆死した。彼らにはその後おぞましい血の粛清が襲ってくる。アレクサンドル2世がパリ万博見学のためこの首都を訪問したのは，1867年6月1日で，開幕から2箇月後の時である。6月6日，ロンシャンで開催された歓兵式の時，ポーランドの亡命者ベレゾウスキーがアレクサンドル2世をピストルで狙撃したが，この時は幸運にも皇帝は無事で，警固に当ったフランス側も大いに安堵したのである。

31）Léopold Ⅱ（1835－1909）：本名 Louis Philippe Marie Victor。皇太子としてブラバン公となり（1840），オーストリー大公の皇女 Maria Henrietta と結婚（1853）したが，政略結婚のため夫婦生活は幸福でなかったので，彼の私生活は当時は何かと噂の種になったが，しかしこのために彼の政治活動が乱れる事は一切無かった。彼はヨーロッパ，東方，アフリカを旅行し見聞を広め，植民地経営と国内産業の発展に備えた。ベルギー独立に関しイギリスの援助を求め，ナポレオン3世の介入排除に成功，普仏戦争では中立を保ち，自国の独立維持のため軍備の強化に努力した。彼は当時暗黒大陸と呼ばれていたアフリカに植民地の建設を構想，スタンリ（1841－1904）のコンゴ探検を援助し，コンゴ自由国を建国し（1877－84），ベルリン会議でこの国の支配権を承認させ（1885.2.26.），後にベルギーに併合する事に成功した（1908）。彼は万国アフリカ協力を設立（1876）。アフリカの開発と発展に寄与している。彼の在位中，ベルギーは商工業の発展が著しく，

植民地経営の成功と共にヨーロッパの中堅国家に躍進していく。

32）Constantin Guys（1805－1892）：デッサン画家，水彩画家，彫刻家。ギリシャ独立戦争に志願兵として参加，戦場の悲惨な情景を素描し，最初はイギリスの『ロンドン絵入り新聞』*Illustrated London News* に，次に『絵入り世界』紙 *L'Univers illustré* に寄稿した。彼は 1848 年の 2 月革命やクリミヤ戦争（1853－56）も体験し，貴重な証言を残している。彼は，スペイン，アルジェリア，エジプトを旅行し，スケッチ集を出版した。セピアなどの淡彩な絵具で浮立たせたペン画や木炭画で，彼は戦場の場面やパリ風景，特に洗練された女性たちの生活を描いた。彼は流れるような線で光の束の間の効果を表現した。ボードレールは『現代生活の画家』*Le Peintre de la vie moderne* の中で，バルザックにより祝福された現代のヒロイズムと美を映像によって表現している，とギスを賞賛している。しかしギスは自分の名を書く事をボードレールに許さなかったので，彼はギスを頭文字で記さざるを得なかった。その訳は，ギスが大変な謙遜家 ouragan de modestie だから，と詩人は言っている。ボードレールはこの論文の中で，ギスを論じると同時に彼の作品から自分の美学を開陳している。

33）David Kalisch（1820－1872）：ブレスラウ生れのドイツのユーモア作家。パリに上京しハイネやプルードンと交際，ドイツの新聞社の特派員として記事を書いたのが文学修業の始りだった。1846 年に帰国，エティンガーの『シャリヴァリ』紙の編集者になった。1848 年に諷刺ユーモア紙 *Kladderadatsch* を創刊した。同時に 2 篇の劇作『10 萬ターレル』*Cent Mille thaler*（ターレルは昔の銀貨），『ベルリン，その夜』*Berlin , la nuit* を発表した。これらは大好評で 100 回以上も續演され，ドイツ演劇のレパートリーの一つになった。彼はこの他にも『育ちの良い宿屋の子』*Garçon d'auberge bien élevé*，『泣くベルリン，笑うベルリン』*Berlin qui pleure et Berlin qui rit* などの作品がある。構成の巧妙さ，しっかりした性格描写，迸る煌めく才智が彼の作品の特色である。また彼の楽しい詩句にも常に政治を諷刺する批判精神を潜ませている。2 冊の詩集は，1857 年と 63 年にベルリンで刊行された。

Louis Kalisch（1814－1882）：初め医学を学んだが，後にハイデルベルグとミュンヘンで比較文学，比較言語学を学び，マインツに住み，1843 年から 46 年にかけユーモア新聞 *Narrhalla* を発行した。しかし 1849 年のドイツ統一運動の政争に巻き込まれ，祖国を去らねばならなくなる。パリとロンドンに滞在し，最終的にパリに定住した。通信員としてパリの記事をドイツの新聞に送っていたが，1870 年からこれを断念し，創作活動に専

念，多くの作品を書いたが，特に『パリ生活』*La Vie de Paris*（1881）は好評で，その観察の才能と善良な揶揄は大いにもてはやされた。

＊　19 世紀ラルース辞典を探索中に，上記 2 人のカリッシュに出会った。最初は David の方だろうと考えたが，Louis はパリに定住しパリで死んでおり（1882. 3 .），またパリ・ガイド風の作品『パリ生活』をマインツで出版しているので，本文中のカリッシュはこちらの方かと迷った末，2 名を掲載することにした。諸氏，何卒了とされよ。

34）Café Tortoni：イタリアン大通りの 22 番地の家の 1 階と 2 階を占めていた。パリで一旗揚げようと上京して来たナポリ出身のヴェロニが，1798 年に開店した。彼はパリで最初にアイスクリームを賣った男である。1804 年にこの店のボーイ長トルトニが買収し，大通りを散策する人たちの逢引きの場にしたので，1830 年から 80 年にかけ特に繁昌した。入口の 3 段の階段は伝説的な場所になり，パリ中のダンディーたち，俗に「トロットニスト」という人士がこの階段を登ったのである。1894 年に閉店。

35）Café Voltaire：第 6 区のオデオン広場 1 番地に 1956 年まで在った。現在はベンジャミン - フランクリン書店が入っている。ヴォルテールの名は，この場所が 1799 年から 1864 年までヴォルテール街と呼ばれていたことに由来する。カフェといえば，パレ - ロワイヤル，タンプル大通り，カルチエ - ラタンのカフェが有名だが，カフェ・ヴォルテールもそれに劣らず繁昌していた。しかし前記のカフェと違って，静かな所がこのカフェの特色だった。客種は「厳格な教授に鍛えられた礼儀正しい学生たち，アカデミーの賞金で生活している詩人たち，学者たち，大学人たち，老人しか讀まない雑誌に寄稿している目鏡をかけた作家たち」である。第 2 帝政初期から注目され，エコル・ノルマルの校長デジレ・ニザール，出版人のシャルパンティエ，ドラクロワ，ミュッセなどが常連だった。次に 1860 年からはジュール・ヴァレス，レオン・ガンベッタが来店する。1857 年からパイプや煙草が許される。1875 年からはポール・アレーヌが指導者になった南仏プロヴァンス出身者が客となり，4 年後にはプロヴァンス語普及を目指すフリブリージ会員が集会する。1898 年にはシャルル・モーラスたちが「アクシオン・フランセーズ」の旗揚げをした。ヴェルレーヌ，モレアス，カチュール・マンデス，サマン，マラルメ，ゴーギャン，ロダンらも客となり，1906 年大統領当選祝賀会がアルマン・ファリエールによって開催された。ラルボー，ジッド，ヴァレリー，ポール - フォルグらもこの客の常連だった。

36）Le bal Bullier：第 5，第 6，第 14 区にまたがり，オーギャスト・コント街とパリ気象台を結ぶ長さ 800 米，幅 20 から 40 米にわたる気象台大通りの 39 番地にあった。

このダンス・ホールは 1858 年にパレ大通りの開通によって姿を消した「冬のプラド」Prado d'Hiver の支店で，1838 年に「夏のプラド」Prado d'Etéの名で開設され，学生たちやグリゼットで賑わった。広い庭園があり，踊る人の服装の奇抜さやカルノー親爺の指揮するバンドが鉄床やストーブの煙突を叩き時にはピストルの発射音まで利用する珍演奏で人々を楽しませた。グランド‐ショミエール・ダンス・ホールに昔務めていた照明係のビュリエールが，1843 年このホールを購入し完全に改造し，昔懐しいダンス・ホールの「クローズリ・デ・リラ」を想起させようと 1.000 株のリラを植え，1847 年 5 月 9 日に開場した。彼はその後も拡張工事を続行し，夏だけの営業を年中無休にし，あらゆる色のガラスを使った花綵式のガス燈のイリュミネーションをつけ，ビリヤードや射的場や人工の木立やあづまやに設置した。シャンソン作者のベランジェ，作家のミュルジェール，詩人のバンヴィルなどが常連だった。このホール全体がやがて簡単に創設者の名をとってビュリエールと呼ばれるようになる。有名なダンサーたち，クララ・フォンテーヌ，リゴレット，モガドールが髪を振り乱して踊っていた。ダンスはポルカからカドリールやワルツに代り，やがてマズルカやスコティッシュ（4 分の 2 拍子のスコットランド舞踊）に変っていく。建物正面のフロントンは七宝焼の煉瓦製で 1895 年に取り付けられたが，大学の標章の上にゴールの雄鶏が立っており，その下で黒いベレー帽をかぶった 2 人の学生と 1 人の女性がカンカンを踊っている。この主題を考案したのはビュリエールの兄弟の婿の薬剤師だったという。第 1 次世界大戦の時（1914－18），軍の兵站部に徴用され，軍服を製造している。1920 年に再開し，「マジック‐シティ」や「ルナ‐パーク」と競争したが，第 2 次世界大戦の前に閉場した。このダンス・ホールは「マビーユ」や「グランド‐ショミエール」と並んで最後の大衆娯楽の大殿堂だった。現在では大学スポーツセンターが建っている。

37）La Troisième Republique：2 月革命によって成立し（1848. 2 .25.），ナポレオン 3 世の皇帝即位による第 2 帝政の実現（1852.12. 2 .）により僅か 4 年半の短命に終った第 2 共和政に対し，第 2 帝政の崩壊後のパリ・コミューヌの乱鎮圧の後にやっと誕生した第 3 共和政（1871. 8 .31.）は，当時のほとんどすべての人の予想を裏切って 70 年の長寿を保ち，ペタン首相のヴィシー政権により終止符を打たれる（1940. 7 .10.）まで續いた。普仏戦争の敗戦処理をめぐるフランス国民の対立が，パリ・コミューヌの大乱となってヴェルサイユ派の国防政府との間に戦闘が開始され，多くの市民の犠牲と首都の破壊と焼失という大惨事をもたらした。この悲劇的被害を剋服し再建の一歩を踏み出した人物が初代大

統領ティエールである。彼とその内閣は敗戦により崩壊に瀕した祖国の経済，財政，軍事，治安などの再構築に着手する。しかしボナパルティスト，王党派，共和派などの政治的対立は深刻で，政権奪取のための権力闘争が激化，各派の合従連衡は目まぐるしく，一時はマク－マオン大統領による王権復古の動きさえあった。ここに至り内部分裂対立していた共和派が団結しマク－マオンを退陣させ（1879.1.30.），共和派のグレヴィが大統領に就任。議会主義民主制に基礎を置く共和政が確立したのである。新政府はティエールの路線を発展継承させ，国内では公教育制度の改革，商工業の振興，軍備増強に務め，戦火にあったパリの復興に努力，国外では新植民地獲得に積極的に乗り出して行く。資本主義社会の形成と帝国主義的膨張政策は，それに批判的な左翼勢力と労働組合の運動を活気づける。クレマンソーを中心とする急進社会党政権の誕生はこのためである。これに対して右翼のナショナリスムも台頭し，ブーランジェ事件やドレフュス事件などは左右対立により激化したのである。アクシオン・フランセーズなど右翼団体の結成も両派対立の中から生れたものといえよう。この国粋主義は現在でもル・ペンらによって受け継がれている。しかし政治以外の分野では科学技術の発展により，工業も大躍進し，自動車，航空機，ラジオなどの電気部門の新産業が出現，植民地経営の成功と相待って，フランス社会は未曽有の経済的繁栄を享受する。美しく復興なったパリと世界をリードするファッション界がその象徴で，史上「ベル・エポック」と呼ばれる時代が到来する。しかしこの繁栄の光の影として失業問題から端を発した社会不安が醸成され，労働者階級の怒りは再び政治における左右対立の激化を招来するのである。ブルジョワ階級の快適豪華な生活を脅かすものは，普仏戦争の時と同じくライン河の彼方から押し寄せて来た。第1次世界大戦の勃発である。フランスは苦戦するが，強大な新興国アメリカの援助を受け辛勝し，アルザス・ロレーヌを奪回する。大戦後のフランスは普仏戦争後と同様に左右両派の対立によって政治的には不安定だったが，世界的傾向として民主的権利が容認されていき，短命に終ったが人民戦線内閣が労働者の権利を大幅に改善した。2か月のヴァカンスの権利もこの時のものである。とはいえ一応の平和な生活が送れた時も永く續かなかった。普仏戦争と同じく，その脅威は再びライン河の彼方から襲来したのである。軍備を増強したナチス・ドイツは前の大戦で失った旧領奪回を策してダンツィヒ及びポーランド回廊を要求した。これが口火となり，第2次世界大戦が始まり，マジノ線の防衛力を過信していたフランス軍は，ロンメル将軍指揮のドイツ軍の電撃的迂回作戦により分断撃破され，1939年9月3日対独宣戦布告から1年もたたない40年6月22日休戦協定に署名して降伏した。国民議会と上院

はペタン元師に全権委任を決議（1940. 7 .11.），ヴィシー政権が成立，第 3 共和政は終ったのである。

38）ユジェニー皇后の脱出：1871 年 9 月 2 日スダンで降伏したナポレオン 3 世は，兵士を救うため降伏する旨の電報を彼女に打電した。呆然とした彼女は 9 月 4 日にガンベッタやジュール・ファーヴルに煽動された民衆がチュイルリ宮に押し寄せ，「スペイン女を打倒しろ！」と怒号している声を聞き，かってフランス大革命の時，この市民たちの父たちがマリ・アントワネットに向って「オーストリー女くたばれ！」と叫んでいた事を想起して戦慄する。オーストリー大使メッテルニヒとイタリヤ大使ニグラが駆けつけ，早急に脱出するよう忠告する。彼女も遂に脱出の決意を固め，ルーヴル宮を抜け，サン‐ジェルマン‐ロクセロワ広場に出たが，着のみ着のままでお金も全く持っていなかった。付添いの女官ブルトン嬢が辻馬車を呼び止め乗り込み，やっとの思いでマラコフ街のアメリカ人歯科医トマス・エヴァンスの家に避難した。彼の親切な計らいでドーヴィル港に着き，彼の友人バーゴイン卿のヨットで英仏海峡を横断，英領ワイト島に無事上陸できた（1791. 6 . 7 .）。これから彼女の長い亡命生活が始まるのである。

39）Radeau de la Méduse：フリゲート盤メデューサ号は，1816 年 6 月 17 日，400 名の乗員と兵士を載せ，シャラント‐マリティーム県の Ai x 島をを 3 隻の僚艦と共に出航しセネガルに向った。ナポレオン戦役中にイギリス軍が占領していたこの植民地が，1815 年の条約でフランスに返還されたので，この地に支配権を再建するため軍隊を輸送する任務が与えられたのである。7 月 2 日，アフリカのブラン岬の南のサハラの海岸から約 40 マイル沖にある Arguin 島の暗礁に乗り上げ，メデューサ号は遭難する。救命ボートが足らなかったため，縦 20 米，横幅 7 米の筏が急造され，149 名が乗り込み，灼熱の太陽にさらされて 12 日間の漂流の後，2 本マストの帆走船アルゴス号に救助された。生存者は僅か 14 名で，そのうちの数人は狂人になっていた。彼らは食糧を節約するため，負傷者や病人に与えず，やがて食糧が尽きると死人の肉を食べたという。絶望からあるいは狂気の発作から，海に身を投げた者も出ていた。発見された時，生存者たちは，日光で燻製になったような人肉の中にうづくまっていた。この悲惨な遭難はフランスの朝野を震駭させた。テオドール・ジェリコー（1791－1824）はこの悲劇に心を打たれ，生存者から体験話を聞くなどして資料を蒐集，救助されようとする劇的瞬間を大作「メデューサ号の筏」に描いた。色彩の鮮烈さ，構図の大胆さはフランス国内では賛否両論が渦巻いたが，ロンドンでは絶賛を博した。絵画におけるロマン主義の宣言となったこの名画は，所有者の幾

多の変遷の後，現在ではルーヴル美術館に展示してある。

40）　親切な歯科医師トマス・エヴァンスは，ユジェニーのフランス脱出に協力したのみならず，イギリスでの亡命生活のためケント州チスルハーストに元皇帝一家の邸を探してやっている。

41）Louis Jules Trochu（1815－1896）：1846 年ビュジョ将軍の幕僚，1853 年大佐でサン - タルノ将軍の副官，クリミヤ戦争のセバストポール攻撃で負傷する。イタリヤ遠征時に師団長として参加，1866 年陸軍省勤務の時に公刊した『1867 年のフランス陸軍』*L'Armée française en 1867* の中で，軍備が不完全のために敗北した旨を述べ，陸軍省を追われる（1867）。1870 年 8 月 17 日，与論をバックにパリ司政官に任命され，皇后とすぐさま対立する。同年 9 月 4 日，皇帝敗北の知らせの後に組織された国防政府首席となり，首都防衛の責任者となったが，軍事批評家として優秀であったが，実戦に当っては優柔不断で消極的であり，プロシャ軍のパリ包囲を解く事が出来なかった。このため，71 年 1 月 22 日，Joseph Vinoy 将軍（1800－1880）に交替しなければならなった。トロシュはこの防衛の失敗にもかかわらず，1871 年には 8 つの県から代議士に選出され，オルレアン派の議員として 1872 年まで務め，引退した。

42）Le Siège de Paris：1870 年 9 月 2 日のナポレオン 3 世降伏により第 2 帝政が崩壊，9 月 4 日パリで成立した国防政府はトロシュ将軍を首班とし，プロシャへの降伏を拒否し戦闘継續を表明，9 月 19 日プロシャ軍の攻囲作戦が開始された。この後約 6 箇月に及ぶプロシャ軍の猛攻を防衛できたのは，ティエールの提案によって 1841 年から 44 年にかけて構築された全長約 34 粁に及ぶ強大な城壁が完成していたからである。この城壁には 94 箇所の稜堡があり大砲 658 門が備えつけられていた。更にこの城壁を取り囲んでヴァンセンヌ要塞を始めとし 16 箇所に要塞が配置され，首都防衛を強化していた。最新鋭のクルップ砲の猛射にもかかわらず，プロシャ軍がパリを武力で陥落させる事が不可能だったのは，この城壁と要塞群が存在したからである。しかし籠城したパリ市民を苦しめたのは，プロシャ軍の砲撃よりも，封鎖による食糧不足だった。飢餓と空腹は弾丸よりも恐ろしかった。ナポレオン 3 世の没落によって帰国したユゴーもこの包囲されたパリに住み，当時の悲惨な食糧事情について記している。死んだ軍馬の肉などは最上等の御馳走で，市民たちは飼っていた愛犬や愛猫，街中の鳩，果は鼠まで捕って食べたという。動物園の像なども射殺され市民の腹中におさまったが，この事例などは第 2 次大戦の敗戦前の日本でも見られた戦争のもたらす悲劇である。愛国的だが絶望的なこの抗戦に終止符を打ったの

は，やはり大局を理性的に批判した現実的政治家である。徹底抗戦を叫ぶガンベラッタらと決別したティエールたちは国防政府を支配し，1871 年 1 月 28 日のビスマルクと 3 週間の休戦条約に署名，2 月 8 日国民議会選挙を実施し，国民議会を成立させ，ティエールを行政長官に指名，彼は国家元首として 2 月 26 日ヴェルサイユで仮講和条約を締結し，普仏戦争を終了させた。かくしてプロシャ軍は 3 月 1 日にパリに入城，約 6 箇月のパリ攻囲は終ったのである。しかし 3 月 18 日国民衛兵の武装解除に反対したパリ市民が蜂起，政府はヴェルサイユに避難，パリに成立した市民の政府パリ・コミューヌとの間に，フランス人同士が戦う流血の惨事が起きる。これも敗戦のもたらした悲劇といえよう。

43）Otto Edouard Leopold, Fürst von Bismarck-Schönhaussen（1815－1897）：ドイツ（プロシャ）の政治家。ドイツ帝国初代首相。帝国成立とその発展に努力した保守政治家。土地貴族ユンカー出身。ベルリン大学などを卒業，1847 年プロイセン議会議員。ベルリンの 3 月革命（48. 3 .）に反対，後の皇帝ウィルヘルム 1 世を知り厚遇され，駐ロシヤ，駐フランス大使を経て，首相兼外相に就任（62. 9 .），「ドイツの諸問題は鉄と血によって解決すべき」旨の 有名な鉄血演説を行った（62. 9 .30.）。議会の反対を無視し軍備拡張に専念，参謀本部の充実に努力した。オーストリーと同盟しデンマークを破りシュレスヴィヒ・ホルシュタインを奪取（1864），その処分に関してはイタリヤと結んでオーストリーと戦って勝利し，その勢力をプロシャから一掃して北ドイツ同盟結成に成功する（1866）。更にドイツ統一の障害となっていたフランスを屈服させるため，エムス電報事件（1870. 7 .13.）によりナポレオン 3 世を挑発，開戦に踏み切らせた（ 7 .19.）。完璧な準備を整えていたプロシャ軍はモルトケ参謀長の作戦通りに展開しフランスに進攻，ナポレオン 3 世をスダンで降伏させ（ 9 . 2 .），71 年 1 月 18 日，ヴェルサイユ宮殿鏡の間でウィルヘルム 1 世がドイツ皇帝に即位，此処にビスマルクの多年の夢だった統一ドイツ帝国が成立，彼も初代首相に就任したのである。その後の彼は，帝国の発展のためのヨーロッパの平和の維持と反ドイツ勢力の抑制を目標にした，いわゆるビスマルク体制の確立である。彼が特に関心を払ったのは，最大の敵フランスの孤立化であり，そのため，オーストリー，ロシヤ，イタリヤ，イギリスの各国とその時勢に応じて同盟結成や協約体制の実現に努力した。また出遅れていた植民地獲得にも乗り出し，アフリカのトーゴやカメルンをドイツ領とした。しかしながら，ウィルヘルム 1 世の歿後に新皇帝に即位したウィルヘルム 2 世（1859－1941）と内政外交両面で対立衝突し，ビスマルクは孫のような皇帝に罷免された（90. 3 .20.）。彼は皇帝の強引な膨張政策がドイツの国際的孤立を招き，帝国の崩壊を危惧

しつつ 1898 年 7 月 30 日に死去した。彼の心配は第 1 次世界大戦の敗戦によるドイツ帝国の滅亡（1918.11.28.）で現実のものとなった。

44）Jules Favre（1809－1880）：リヨン出身の共和派の代議士で有名な弁護士でもあった。彼は第 2 帝政に反対し，ナポレオン 3 世の暗殺未遂犯でイタリヤの革命戦士であったフェリス・オルシニ（1819－1858）とその同志たちの弁護を買って出た。ファーヴルの雄弁も空しく，オルシニらは死刑の判決を受け，1858 年 3 月 13 日に処刑された。彼は立憲議会（1848. 4 .），立法議会（1849. 5 .）に代議士として選出され，1851 年 12 月 2 日のクー・デタに反対した。1857 年の立法議院にはセーヌ県から選出された 5 名の共和派の代議士の一人に入っている。メキシコ遠征（1861），普仏戦争に反対，帝政崩壊の第 3 共和政誕生に尽力（ 9 . 4 .），国防政府の外相に就任した。セーヌ - エ - マルヌ県モー郡のフェリエールでのビスマルクとの会見（1870. 9 .19.－20.）では，領土割譲を要求する鉄血宰相の命令的強請をファーブルは拒否した。国防政府の方針も領土割譲には断固反対の方針をきめていたからである（ 9 . 6 .）。1870 年 11 月のビスマルクとの第 2 回会談も双方の主張が対立し妥協に至らなかった。かくてプロシャ軍によるパリ攻撃が開始された。最終的にフランスの敗北を認めざるを得なくなり，政府を代表して休戦条約に調印しパリ開城を約束したのである（1871. 1 .28.）。彼は引き続きティエール政府の外相としてフランクフルト講和条約に調印（1871. 5 .10.），アルザス，ロレーヌ州の割譲，償金 50 億フランの支払などを約束した。しかしこの内容に憤激した愛国的パリ市民が決起し，パリ・コミューヌの成立の一因となる。ファーブルはその後 3 か月間外相の任にあったが辞任した。彼はアカデミー・フランセーズの会員（1867 年選出）であり，『国防政府』*Le Gouvernement de la Défense nationale* と題する回想録（1871－75）がある。

45）ガンベッタの気球によるパリ脱出：1870 年 10 月 7 日，地方での援軍を組織するため，ガンベッタはプロシャ軍が包囲するパリから気球で脱出する。モンマルトルの丘からアルマン・バルベス号という気球に彼が乗り込むと，その壮図を祝して集った市民たちが一斉に拍手した。気球の操作は航空写真で有名なナダールである。ガンベッタの乗ったアルマン・バルベス号は同行するジョルジュ・サンド号と共に上昇し，包囲されたパリ市民の希望を乗せ雲間に消えていったのである。

46）François Achille Bazaine（1811－1888）：1831 年軍人となりアルジェリアの外人部隊に勤務，次にスペインで戦い（1835－38），アルジェリアに戻り部隊長に昇進しアルジェリア女性と結婚する。クリミヤ戦争に従軍，セバストポール占領で武勲をたて陸軍

少将になる。メキシコ遠征軍を指揮し（1862－67）プエブロを占領した（1863）。Forey 将軍（1804－1872）に代り総司令官となり元帥に列せられた（1864），夫の不貞に悩んでアルジェリア人の妻が自殺すると，彼はメキシコの名門の女性と再婚するが（1865），この新妻の影響でマキシミリアン皇帝の失脚を図ったという。ナポレオン 3 世の不興を一時蒙ったが，大衆的人気により返り咲き，親衛隊司令官次にライン軍司令官となった（1870）。普仏戦争が勃発するや，モルトケ指揮のプロシャ軍に連戦連敗，メッツに籠城して解放のために進出して来たマク‐マオン指揮のシャロン軍団との連絡のために何一つせず，17 万 3 千の兵士と共にプロシャ軍に降伏し，フランスの敗北を決定づけてしまった（1870.11.27.）。敗戦の責任者として国民の怒りの的となり拘留され，オマール公が裁判長を務めるトリアノン軍法会議で軍籍剥奪と死刑の判決を下された（1873.12.10.）。しかしマク‐マオン大統領により禁錮 20 年に減刑され，カンヌの沖合にあるレラン諸島の一つサント‐マルグリット島の要塞監獄に収容された。この監獄は長い間国事犯を収容しており，かの鉄假面も此処に収容されていた。しかしバゼーヌは 1874 年 10 月 9 日から 10 日にかけて妻の協力を得て脱走に成功，マドリッドに亡命しそこで客死した（1888. 9 . 23.）。彼は『ライン軍団，1870 年戦争の挿話とメッツの包囲』*L'Armée de Rhin, Episodes de la guerre de 1870 et blocus de Metz*（1883）を発表して自分の行動を正当化しようとしている。

47）ボルドーの国民議会の選挙は 2 月 8 日に施行され，正統王朝派，オルレアン派などを合せた王党派が 675 議席のうち 400 議席を獲得した。地方の選挙民は共和政というとフランス大革命や第 2 共和政の混乱や無秩序を想起し，安心感のある地方の名士に投票した。彼らはだいたい保守派で古き良き時代のシンボルでもあった。この議会は 2 月 16 日にティエールを共和国行政長官に，ジュール・ファーブルを大統領に選出する。戦勝国の鉄血宰相ビスマルクと対等に渡りあえるのは，幾度もの政変を生き抜いてきた古強者ティエールしかいない，と誰もが認めていたからである。

48）パリ攻囲中に窮乏生活を送っていた市民たちに，ボルドーの国民議会は国民衛兵への俸給の支払い停止，家賃や短期債務の猶予措置の廃止などを布告し，市民たちを反政府活動に走らせた。敗戦直後から数多く結成された共和派のクラブや政府の布告に憤激した国民衛兵が団結し，国民衛兵中央委員会が組織される。彼らは 3 月 18 日にパリ市庁舎を占拠し，市の行政権を手中にした。この日の早朝，ティエールはプロシャ軍に没収されないようにベルヴィルとモンマルトルの丘に隠していた 200 門余の大砲を政府側に引き

上げるため，収容部隊を派遣した。しかし住民に阻止され，兵士たちも国民衛兵に同調して上官の命令をきかず，指揮に当っていたクレマンとルコントの 2 名の将軍を銃殺したのである。市中の不穏な空気に常に敏感だったティエールは武装蜂起の危険を悟って，政府を直ちに安全なヴェルサイユに移転させた。ヴェルサイユ政府とパリの和解工作は結局失敗，3 月 26 日パリで国民衛兵中央委員会の管理の下に選挙が断行され，29 日に市民の自治政府パリ・コミューヌが成立，かくて 2 つの敵対する政府が出現したのである。

49）Charles Delesccluze（1809－1871）：極左の政治家。7 月王政を猛烈に攻撃したため，政府の追及を逃れベルギーに亡命しなければならなかった。7 月王政崩壊後の 1848 年 2 月に帰国したが再び亡命しなければならなくなり（1849－53），帰国後はナポレオン 3 世に反抗し，Cayenne へ流刑となった（1853－59）。第 1 次インターナショナルの主張を自分の新聞 *Le Reveil* に掲載した。1871 年第 3 次公安委員会のメンバーになり，パリ・コミューヌの陸相に就任，ヴェルサイユ政府との戦闘中，71 年 5 月 25 日，バリケード上で戦死した。

50）Félix Pyat（1810－1889）：弁護士，ジャーナリストで *La Revue britannique* 誌の編集長を務めた。社会主義的劇作『2 人の鍵屋』*Les Deux Serruriers*（1841）や『パリの屑屋』*Le Chiffonnier de Paris*（1847）で有名になる。社会主義の領袖と目され，第 2 共和政府委員となり，立憲議会，立法議会で代議士に選出され，極左派に属した（1848－49）。49 年 6 月暴動の後イギリスに亡命，フランスに帰国するや *Le Combat* 紙を創刊（1870），パリ・コミューヌの第 1 回公安委員会実行委員長に就任したが，コミューヌ敗北後再びイギリスに亡命，欠席裁判で死刑の判決を受けた（1873）。1880 年の大赦で帰国，同年にマルセーユから代議士に選出され，ブーランジェ将軍に反対した。

51）Gustave Flourens（1838－1871）：父ピエール・フルーランス（1794－1867）は有名な生理学者。彼は熱烈な共和派でトルコに反乱を起こしたクレタ島の人々の援兵として参加（1866），帰国後，1870 年 9 月 4 日の第 3 共和政誕生の戦いに加わり，ヴェルサイユ政府の講和に抗議した。彼はマルセーユでロシュホールに協力 *La Marseillaise* 誌を刊行，コンスタンチノープルとアテネで新聞を発行している。1870 年 10 月 31 日の暴動により投獄されたが，国民衛兵によって解放された（71. 1 .21.）。パリ・コミューヌの指導者の一人として闘ったが，1871 年 4 月 3 日，デマレという憲兵によりサーベルで斬殺された。

（続　く）

（追　　記）

（1）　参考図書などは，〔Ｉ〕の巻末に掲載されてありますので，そちらを御参照下さい。

（2）　前稿〔XXV〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

ｐ．2．下から10行目　　3世<u>が</u>

ｐ．3．下から 4 行目　　フー<u>コー</u>

── 2007.9.5 ──